

展覧会情報

江戸時代のよこはま 青葉の村々と矢倉往還

会場 横浜市歴史博物館
 電話045-912-7777
 期間 1月26日(土)～3月16日(日)

古地図の世界Ⅶ～巡礼図～

会場 岐阜県博物館
 電話0575-28-3111
 期間 2月16日(土)～3月20日(木)

古地図企画展 地図を楽しむ

会場 神戸市立博物館
 電話078-391-0035
 期間 3月1日(土)～3月30日(日)

特別展 明治小樽徒然—地図と日記でたどる明治

会場 小樽市総合博物館
 電話0134-33-2523
 期間 2月2日(土)～3月31日(月)

特集展示「城下町大坂」

会場 大阪歴史博物館
 電話06-6946-5728
 期間 2月20日(水)～3月31日(月)

テーマ展「京の鳥瞰図」

会場 京都市歴史資料館
 電話075-241-4312
 期間 平成19年11月30日(金)～4月6日(日)

ハマの謎とき—地図でさぐる横浜150年

会場 横浜開港資料館
 電話045-201-2100
 期間 1月30日(水)～4月20日(日)

巡検開催のご案内

■ レトロ巡検第2弾 「青梅昭和レトロタウン」 ■

今回の巡検(見学会)は「青梅昭和レトロタウンを歩く(仮称)」と題し、昭和の映画看板、懐かし商店など、町中がレトロ感いっぱい「天然モノのレトロ」の町「青梅」を歩きます。

詳細はご案内いただく伊藤等先生が現地調査中ですので、多少異なるかも知れませんが、地域の見所を少しご紹介します(以下、エキサイトニュース参考)。

この青梅という町、普通なら間違いなく消えてなくなってしまうような商店がフツーに営業を続けています。金物屋の店頭には「湯たんぼ」が並び、電気屋の窓には「98Note」のステッカーが貼られ、薬局の店頭には恐ろしくレトロな化粧品が並んでいる町、青梅。「昭和レ

トロ商品博物館」、「青梅赤塚不二夫館」、「昭和幻燈館」などのなつかしい博物館も魅力です。

ご案内：伊藤等先生(日本大学)

開催日：平成20年4月5日(土曜日)

荒天の場合は翌週12日(土曜日)に順延

定員他：約20名。参加締切は3月28日(金曜日)

申込み：電話 03-3262-1486 Fax. 03-3234-0872

mail chizujoho@gmail.com のいずれか

集合：JR青梅線青梅駅改札外側 午前10時(予定)

コース：未定

参加費：2,000円(博物館入館代、資料等含む)。なお現地までの交通費、昼食代は各自ご負担下さい。

ご注意：軽快で歩きやすい服装でおいで下さい。天候や諸事情によりルート等を変更する場合があります。市街地ですので、車の通行にご注意下さい。参加者には集合場所と簡単なご案内をお送りします。



地図 紹 び

第32回 陸測初期色刷図の流れ

—20万分1輯製図から帝国図のばあい—

帝京大学理事 井口悦男

日本の地形図は、欧米先進技術の導入の一例として、色刷図方式をとるフランス様式を学んで開始されたが、全国図速成にあたり、国家予算の配分規模から、フランスの隣国、新興ドイツ様式によらざるを得ず、一般印刷図は、1色墨刷を明治当初期以来をとることとなった。唯一、色刷の孤塁は、20万分1帝国図であった。

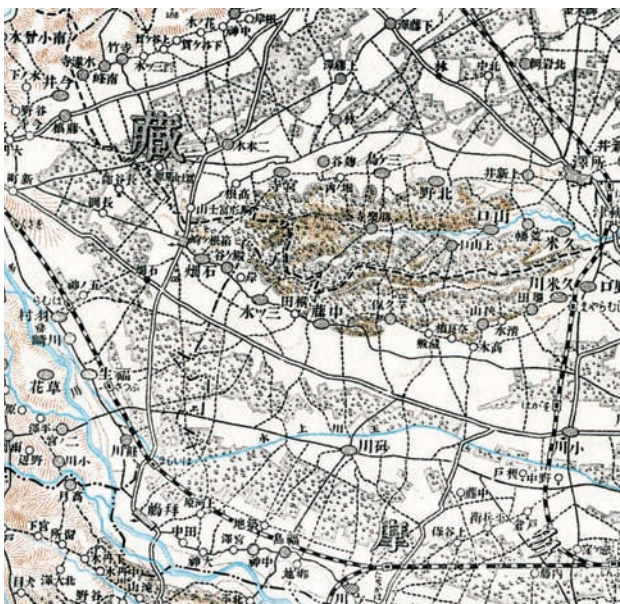
色刷の帝国図は、明治34 (1901) 年版にはじまるが、その前身「輯製図」では、墨刷のケバ式編集図で、その「東京」図の明治21 (1888) 年初版に、3色図も作成されていたことが知られる。20万分1仮製図大阪近傍の6面 (明治19、20年版) に続く、早い時期の貴重例である。しかし購入例が少なかったためか、それら現図の残存は、極めて希である。

とくに、20万分1輯製図「東京」の3色版は、1面が国会図書館に所蔵されるに限られた。近頃、長岡正利氏により2番目の図の所在が報告されたばかりである。

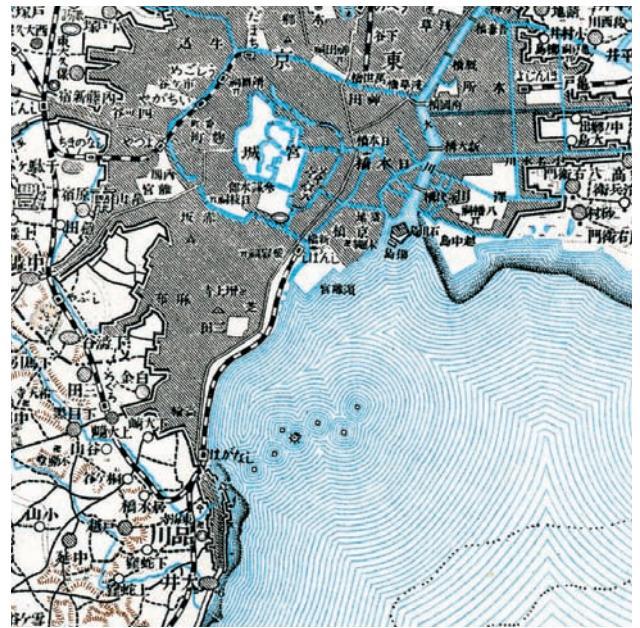
(古地図研究ニュース第48号、平成17年3月)

同じ20万分1図ではあるが、その表現、精度が異なり、色刷発行時期が輯製図で明治21年、帝国図で明治34年となり、発行間隔が、墨刷の修正発行回数に比べ、大きいことから、20万分1図に見られる色刷発行原則は、輯製図のそれは例外発行とし、帝国図へ移行に伴うと考えられてきた。

ところが、最近、日清戦争期から台湾駐在にはじま



20万分1輯製図「東京」色刷再版テスト刷カ



20万分1輯製図「東京」色刷再版に見られる東京湾奥の見事な水色装飾水涯線。農商務省地質局の地形図に描れたそれ以上の繊細さである

る陸地測量師の旧蔵図から、輯製図「東京」の明治28 (1895) 年修正版に、色刷版の作成を物語る、洋紙によるテスト刷が出現した。永年待ち望んだ、夢の出会いである。

輯製図の再版は、各図ほぼ明治27 (1894) 年で、「東京」図も同様であるが、翌28年、さらに修正 (現在の表現で三修) 発行される。多分当時新設の「川越鉄道」 (国分寺～川越間) が完成しているので、連続修正図の発行とされたと見られる。この三修図に、いわゆる3色版が作成された。この事実は、未発行のためか、伝えられていない。

しかし、輯製図に色刷りの修正図計画の存在が明らかになった現在、色刷帝国図への衣替え移行のテスト版としての輯製図色刷版、という考えを導き出せないだろうか。帝国図発行の最初の図が「杵築」(現、大社) とか「見島」のような、地形表現の僅かの図から開始している事実も踏え、線描のみの色刷から、面描の陰影表現を描く立体視へ慎重進め、現在の図描に到達させたと言えようか。

なお、3色刷とされている輯製図では、茶刷部分に「赤茶」と「濃茶」とが見られるから、4色刷があたっという。

また、墨刷図の海面は、ほぼ白地のままに対し、色刷図では繊細な水涯曲線の重なりが水色で、見事に描入、埋めつくされる。これは帝国図に引き継がれなかった。

(08.01.10)

両図とも明治28年修正版「東京」色刷テスト刷カによる